

熊野上遺跡

国道153号線箕輪バイパス建設に伴う
緊急発掘調査報告書

1990年

箕輪町教育委員会
長野県伊那建設事務所

熊野上遺跡

国道153号線箕輪バイパス建設に伴う
緊急発掘調査報告書

1990年

箕輪町教育委員会
長野県伊那建設事務所

序

箕輪町教育委員会

教育長 堀口 泉

熊野上遺跡は、沢区のほぼ中央部、町立箕輪北小学校の南西段丘上にあります。周辺は、西天竜用水路の開設によって稲作地帯となりましたが、農業地域が電子工業をはじめさまざまな精密工業の進出で住宅地に変わりつつあります。

この地は、以前より土器片や黒曜石等が採集できる場所として知られており、町の重要な遺跡の一つがありました。今回国道153号線・箕輪バイパスが計画されて、上記遺跡地内を通過するのに伴い、緊急発掘調査を実施し記録保存を行うこととなりました。調査地の地形は段丘の突端で先般行われた丸山遺跡から洞を一つ隔てた南にあたり遺構・遺物の出土も同様に期待致しましたが、開田時の工事で意外に破壊が進んでおりました。成果につきましては本書に記してあります。今後多くの方々に広く活用されて、郷土の歴史解明の一助になれば幸いと存じます。昭和55年度より始まりました箕輪バイパスに関わる緊急発掘調査は今回を以ってひとまず終了致すことになりました。

末筆になりましたが、今回の調査に際し深いご理解とご協力をいただきました沢区の皆様方をはじめ、長野県伊那建設事務所ならびに調査に協力された団員の方々に心より感謝致しまして序といたします。

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪2880-2番地他に所在する熊野上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、長野県伊那建設事務所より委託を受け、箕輪町教育委員会が行ったものである。調査は、平成元年8月2日から9月7日まで実施し、引き継ぎ整理作業及び報告書の執筆作業を行った。
3. 本書を作成するにあたって、作業分担を以下の通り行った。
 - ・遺物の復元—福沢幸一
 - ・石器の石材鑑定—樋口彦雄
 - ・遺構図の整理・トレース—宮脇陽子
 - ・遺物の実測・トレース—赤松 茂、根橋とし子、宮脇陽子
 - ・遺物拓影—井上武雄
 - ・挿図作成—赤松 茂、井上武雄、宮脇陽子
 - ・写真撮影・図版作成—赤松 茂
4. 遺構図は、次の縮尺に統一した。
 - 住居址・ピット群—1:60、土壤—1:40
 - 遺構図のスクリーントーンは、次のものを表す。
 - 細点—炉の火焼状況
5. 遺物実測図は、次の縮尺に統一した。
 - 縄文土器—1:4、縄文土器拓影図—1:3、石器—1:3
6. 本書の執筆は、赤松 茂、井上武雄、宮脇陽子が分担した。
7. 本書の編集は、赤松 茂、井上武雄、根橋とし子、宮脇陽子が行った。
8. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会に保管されている。広く活用されたい。

本 文 目 次

題 字 団 長 橋口彦雄
序 教育長 橋口 泉
例 言
本文目次
挿図目次
図版目次

| | | |
|---------|--|----|
| 第 I 章 | 遺跡の立地..... | 1 |
| 第 1 節 | 位 置..... | 1 |
| 第 2 節 | 自然環境..... | 2 |
| 第 3 節 | 歴史的環境..... | 3 |
| 第 II 章 | 発掘調査の経過..... | 6 |
| 第 1 節 | 調査に至る経過..... | 6 |
| 第 2 節 | 調査団の編成..... | 6 |
| 第 3 節 | 調査日誌..... | 8 |
| 第 III 章 | 遺跡の状態..... | 9 |
| 第 1 節 | 調査の方法と結果..... | 9 |
| 第 2 節 | 層 序..... | 9 |
| 第 IV 章 | 遺構と遺物..... | 13 |
| 第 1 節 | 縄文時代..... | 13 |
| | 1. 住居址..... | 13 |
| | 1号住居址..... | 13 |
| | 2. 土 壤..... | 15 |
| | 1号土壤.....15, 2号土壤.....15, 3号土壤.....15, 4号土壤.....17, 5号土壤.....17, 6号土壤.....17, 7号土壤.....19, 8号土壤.....19, 9号土壤.....19, 10号土壤.....19, 11号土壤.....19, 12号土壤.....20, | |
| | 3. ピット群..... | 20 |
| | 4. 遺構外出土遺物..... | 22 |
| 第 V 章 | ま と め..... | 23 |

挿 図 目 次

| | | |
|------|---------------------|----|
| 第1図 | 位置図..... | 1 |
| 第2図 | 周辺遺跡分布図..... | 5 |
| 第3図 | 基本層序模式図..... | 9 |
| 第4図 | 周辺地形と調査区設定図..... | 10 |
| 第5図 | 全体図..... | 11 |
| 第6図 | 1号住居址実測図..... | 13 |
| 第7図 | 1号住居址出土遺物実測図..... | 14 |
| 第8図 | 土壤実測図1 | 16 |
| 第9図 | 土壤実測図2 | 18 |
| 第10図 | ピット群実測図..... | 20 |
| 第11図 | 土壤・ピット群出土遺物実測図..... | 21 |
| 第12図 | 遺構外出土遺物実測図..... | 22 |

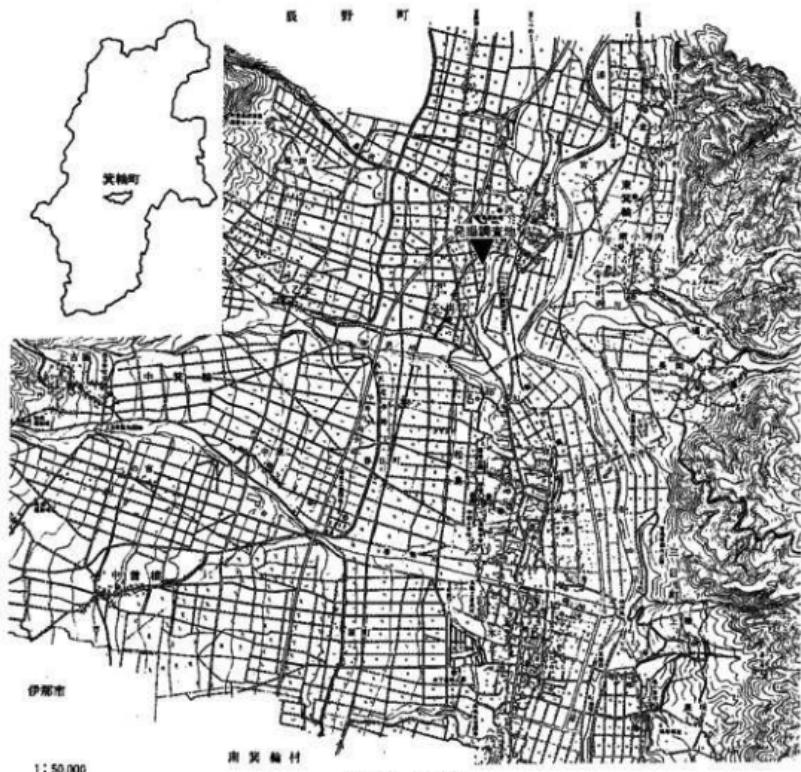
図 版 目 次

- 図版 1 調査地遠景、調査地近景
- 図版 2 調査区全景、1号住居址
- 図版 3 1号住居址炉、1号住居址柱穴内遺物出土状況
- 図版 4 1号土壤、2号土壤
- 図版 5 3号土壤、4号土壤
- 図版 6 5号土壤、6号土壤
- 図版 7 7号土壤、8号土壤
- 図版 8 9号土壤、10号土壤
- 図版 9 11号土壤、12号土壤
- 図版10 調査風景
- 図版11 1号住居址出土遺物1、1号住居址出土遺物2
- 図版12 土壤出土遺物、遺構外出土遺物
- 図版13 土壤・遺構外出土遺物、調査団員

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位置

熊野上遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪2880-2番地他は、北緯 $35^{\circ}55'50''$ 、東経 $137^{\circ}59'07''$ の地点で標高約714mに位置する。この位置を中心と考えると、東西では標高にかなりの高低差があるが、南北については大出区から南側の松島区へかけてなだらかに低く、北側は各地区によって若干の高低差が認められるが緩やかな傾斜地となっている。ここは眺望もよく東南に仙丈岳、東北には守屋山を望むことができる。また、天竜川の対岸にある南小河内区、長岡区が展望できる。天竜川との比高差は約40mを測る。



第1図 位置図

第2節 自然環境

箕輪町は、西に木曽山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、飯田湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。天竜川西岸に発達した広大な扇状地は、木曽山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成された複合扇状地である。北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、帶無川、大泉川、小沢川と続き、南ほど流路が長くなっている。それは、西側の山々が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路に比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂の層で構成されている。天竜川はその扇端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を造り上げている。段丘の突端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇央部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜繊層と沖積層の境に出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利とあわせ、豊かな水源に恵まれている。

熊野上遺跡は、この河岸段丘の突端部にそって帯状に連なる遺跡群の一つであり、上記の通り恵まれた自然環境の中に存在しているといえよう。



遺跡周辺地形

1 : 10000

第3節 歴史的環境

箕輪町における天竜川右岸の遺跡の分布状況は、河岸段丘の突端部にみられる遺跡(1・2・6~13)と、深沢川や桑沢川などの天竜川に注ぐ小河川の両岸に存在するもの(3~5)とに分けられ、共に地形・水利などの自然条件のよい場所に立地している。かつて、この広い扇状地は灌漑用水に恵まれず、山林・原野が多く耕地も川沿いの一部を除いては畠地が大部分であった。しかし、大正から昭和にかけて、西天竜幹線水路の建設とともに大規模な構造改善が行われ、その後は、上伊那を代表する水田地帯となっている。このような開発により扇状地や河岸段丘突端部に立地する遺跡の一部が破壊を受けているのではないかと推測される。今後もこの一帯における開発には、充分な注意を図り、遺跡の保護に努めて行かなければならない。

- ①熊野上遺跡 繩文時代の土器片、黒曜石の散布地として確認されている。
- ②丸山遺跡 繩文時代中期の土器片や黒曜石が散布しており、曾利I式の大型土器や石冠が既出している。
- ③五輪遺跡 繩文時代中期から中世にかけての複合遺跡で、昭和48年度に発掘され、繩文時代中期の遺構、遺物が出土している。
- ④中道遺跡 中央道建設に伴う発掘により、繩文時代中期から平安にかけての複合遺跡であることが確認され、昭和63年度の町教育委員会の発掘調査で、繩文時代初頭の土墳群と、古墳から奈良時代にかけての遺構・遺物の他、中世の土墳墓も出土している。
- ⑤堂地遺跡 中央道建設に伴う発掘により繩文時代中期から平安にかけての複合遺跡であることが確認され、また町内で唯一の方形周溝墓も検出された。昭和62年度の町教育委員会の発掘で、奈良から平安時代にかけての遺構や遺物が出土した。
- ⑥大出遺跡 繩文時代中期の土器片や石器、平安時代の須恵器片などが確認されている。
- ⑦松島王墓古墳 上伊那唯一の前方後円墳で全長58m・高さ77mの規模を誇り、6世紀後半の築造と推定される。県内では唯一の車塚形式の古墳で、昭和40年に県史跡に指定された。
- ⑧本城遺跡 弥生から平安時代にかけての遺物の散布地として確認されている。
- ⑨中山遺跡 繩文時代中期初頭から中葉の土器片・石器の他平安時代の遺構、遺物が昭和60~62年度にかけての中学校プール及び社会体育館建設に伴う発掘で確認された。
- ⑩藤山遺跡 繩文時代中期初頭から中葉の土器片・石器が確認されている。

- ⑪上の林遺跡 以前より遺物の散布地として知られており、縄文・弥生・平安の遺構・遺物が55～57年度にかけての箕輪工業高校増棟に伴う発掘調査によって確認されている。
- ⑫北城遺跡 弥生時代から中世にかけての複合遺跡で昭和47年度県企業局の分譲住宅団地造成にかかる発掘調査で中世の火葬墓群が検出している。
- ⑬南城遺跡 弥生から平安時代の遺物の散布地として確認されている。



- | | | | | | |
|-------|------|------|------|------|------|
| ①熊野上 | ②丸 山 | ③五 輪 | ④中 道 | ⑤堂 地 | ⑥大 出 |
| ⑦王墓古墳 | ⑧本 城 | ⑨中 山 | ⑩藤 山 | ⑪上ノ林 | ⑫北 城 |
| ⑫南 城 | | | | | |

第2図 周辺遺跡分布図

第II章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

長野県伊那建設事務所は、箕輪町を通過する国道153号線が通勤時を中心とする著しい交通渋滞に対処するため、南箕輪村との町村界より伊北インター・エンジまでの天竜川沿いにバイパスを計画し、昭和48年度より事業が進められてきた。箕輪町教育委員会は、町の南部に広がる箕輪遺跡内に同路線が通過するのに伴って、昭和55年度に確認調査を、55・56・57・58年度には本発掘調査を実施して記録保存を行ってきた。そして、全長計画6,795mのうち木下南部より大出までの4,480mが完成し、平成元年3月に供用を開始した。

今年度、残りの区間の完成による全線開通を早急に進めるため、計画路線内に所在する埋蔵文化財の保護協議を、県伊那建設事務所と県教育委員会文化課と町教育委員会の三者で行った結果、沢の丸山遺跡と熊野上遺跡の二遺跡の緊急発掘調査を実施し、記録保存をすることとなった。路線が沢町営住宅の西北を通過するために、西へ広がる熊野上遺跡の東端部を調査することは、遺跡の性格を知る上でかなり重要視されよう。また地元では、この一帯で土器や石器が採取できることが以前より知られており、開墾や耕作中にも多くの遺物が出土したという事実もあり、調査の成果に大きな期待が寄せられていた。

調査は、このような経過によって8月2日～9月7日までを調査期間とし、町教育委員会が県伊那建設事務所より委託を受けて、新たに調査団を結成し調査を実施する運びとなった。

第2節 調査団の編成

調査団

顧問 丸山敏一郎 赤穂高校定時制教頭

団長 橋口彦雄

担当者 柴登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員

調査主任 赤松茂 箕輪町郷土博物館学芸員

調査員 福沢幸一

" 宮脇陽子

団員 荒川織光、石川清子、井上武雄、井上隆次、大槻泰人、岡 章、

岡 正、唐沢光国、小池久人、小島久男、小平和子、小林信義、

笹川正秋、清水すみ子、白鳥博臣、戸田隆志、中坪侃一郎、根橋とし子、

野村金吉、林 栄市、松田貢一、松田幸雄、水田あき子、水田重雄、
山岡ゆき子

| | | |
|-----|-------|----------------|
| 事務局 | 堀口 泉 | 箕輪町教育委員会教育長 |
| | 上島富作夫 | 箕輪町教育委員会社会教育課長 |
| | 市川健二 | 箕輪町教育委員会社会教育係長 |
| | 柴 登巳夫 | 箕輪町郷土博物館主任学芸員 |
| | 石川 寛 | 箕輪町郷土博物館学芸員 |
| | 赤松 茂 | 箕輪町郷土博物館学芸員 |
| | 赤沼悦子 | 箕輪町郷土博物館臨時職員 |

第3節 調査日誌

8月2日（水）曇

調査区内に10m間隔に4本と5m間隔に2本のトレーナーを入れた。ピット状の遺構が3基と縄文時代の土器片が出土した。遺構・遺物が確認されたため本調査を行うこととなった。

8月22日（火）晴

終日、重機による表土はぎが行われる。

8月23日（水）晴

重機による表土はぎと、手作業の上面確認が行われる。削平のため破壊が著しく上層部はかなり削られていた。

8月24日（木）晴

上面確認とグリットの設定が行われる。

8月25日（金）晴

住居址が1軒と土壙12基が確認され、土壙の半割、および測量を行う。土壙内や上面確認時に縄文土器片・石器が出土した。

8月28日（月）晴

1号住は壁と床面がなく、周溝と柱穴・炉が確認できたのみ。炉・土壙の半割、測量が行われ、その後全掘をした。柱穴2内から20cm大の土器片が出土した。

8月29日（火）晴

1号住・土壙の全掘が進められる。6号土壙内の集石の測量準備も始まり、掘る作業が一段落した。

8月30日（水）晴

土壙と集石の平面測量と土壙のエレベーションの測量をした。

8月31日（木）晴

1号住・土壙・集石の平面測量と住居址のエレベーションの測量をした。

9月1日（金）晴

集石の平面測量とエレベーションを測量した。午後から全体測量を行った。

9月7日（木）晴

遺構図面の確認を行い、また補充した。本日にて、すべての発掘調査を終了した。

9月8日から室内にて土器洗い、注記、実測、拓本、トレース、執筆等の整理作業を開始した。

第III章 遺跡の状態

第1節 調査の方法と結果

今回の調査は、前章で述べているように遺跡包蔵地が広範囲に渡ると予想されるので、遺跡地内に予定されている全工事面積を調査対象とした。調査地は遺跡の東側限界地に当たるが、以前より水田として使用されており、開田時の工事で意外に破壊されていて遺構の保存状態は良好とは思えなかった。調査に先立ち現地を視察し協議の結果、約1,000m²を対象として実施した。

調査地はまず東西に4本、南北に2本のトレンチを設置して小型重機で掘り、遺構の確認を行った。その結果遺構確認ができた5~10cm上までの表土を大型重機で除去した。更に手作業で遺構確認と遺構内の調査を行い、写真撮影・測量等を記録した。表土が硬く遺構の確認作業が困難なところには小型重機を投入して作業効率の向上に努めた。確認できた遺構は、その順に種別毎番号を付けた。グリットは遺構確認が終了した後、4m四方で主軸を南北方向に併せて設定し、南北はローマ数字、東西はアルファベットを使用して表示した。また、標高は調査区の南側にある水準点より移動し、西端部にベンチマーク(715,000m)を落とした。

調査の結果下記の遺構が検出されたが、やはり上部は削り取られた形跡が顕著であった。

- ・整穴式住居址1軒（縄文時代）
- ・土壙12基（縄文時代）
- ・ピット群1ヶ所（縄文時代）

第2節 層序

天竜川西側の扇状地上における地質構造は、耕作土など 715.00m

の黒褐色腐食土—ローム層—砂岩・粘板岩を主とする円礫

層・砂層という堆積状況が普遍的にみられ、河岸段丘の突端部に位置する熊野上遺跡もこれを基本としている。

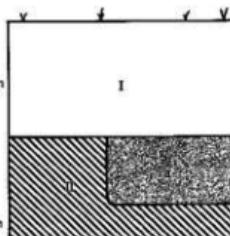
I層—表土層。水田や畑地として使用されていた耕作土の 714.50m

他、開田時によって人為的に移動された置き土や水田敷もI層としてまとめる。

II層—黃色土層（ローム層）。粘性・締りが共に強く、この

層の確認面が遺構検出面であった。遺構（a層）は、 714.00m

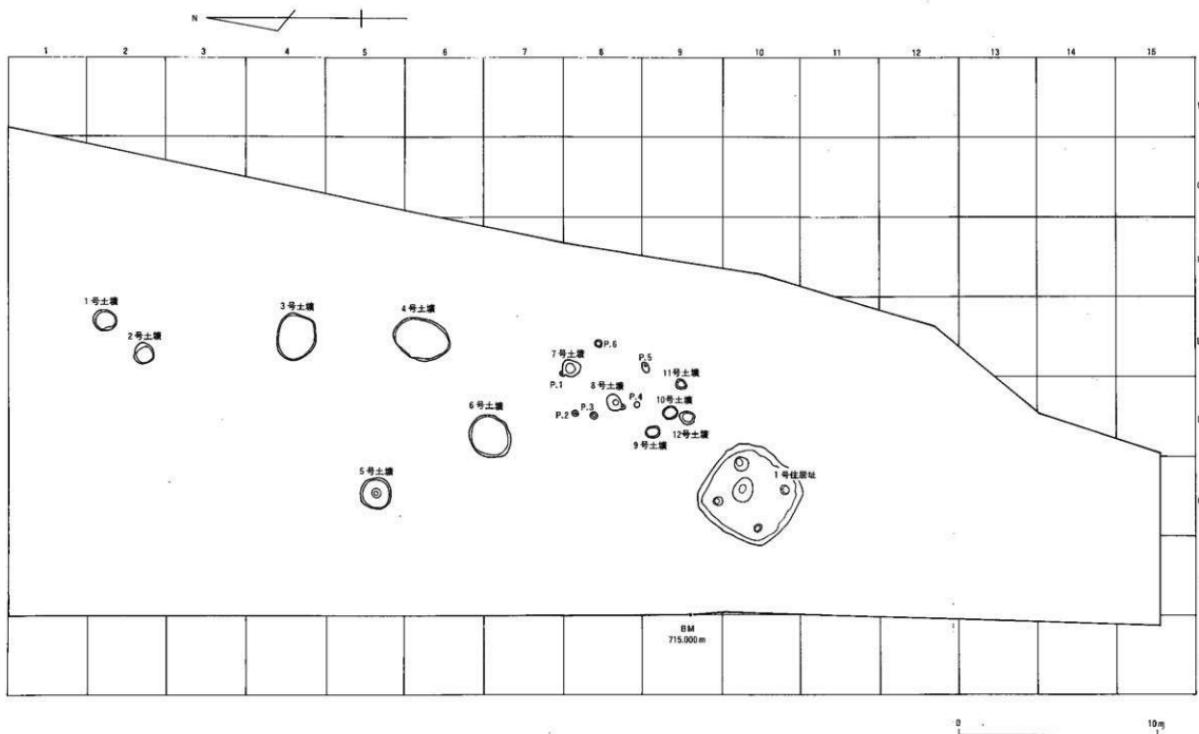
これを掘り込んで構築されていた。



第3図 基本層序模式図



第4図 周辺地形と調査区設定図



第5図 全体図

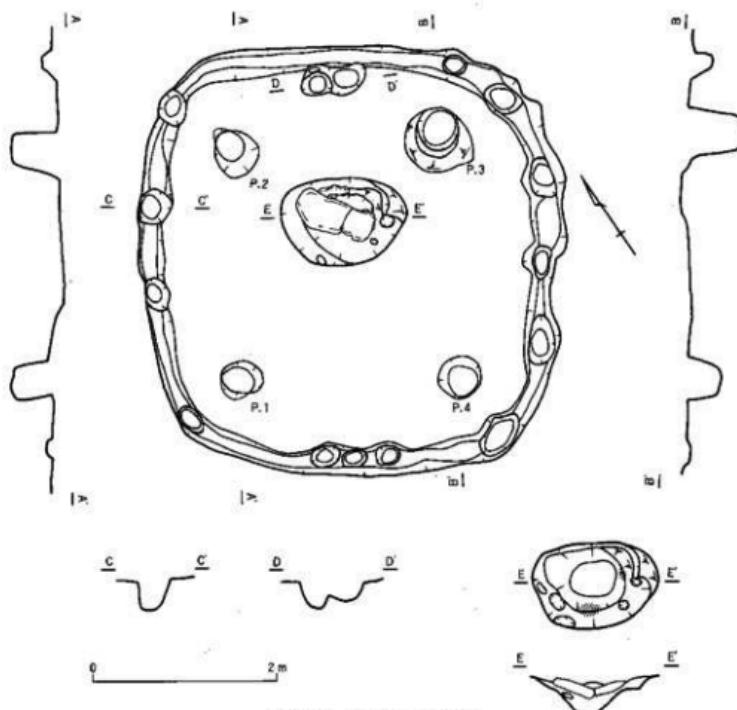
第IV章 遺構と遺物

第1節 繩文時代

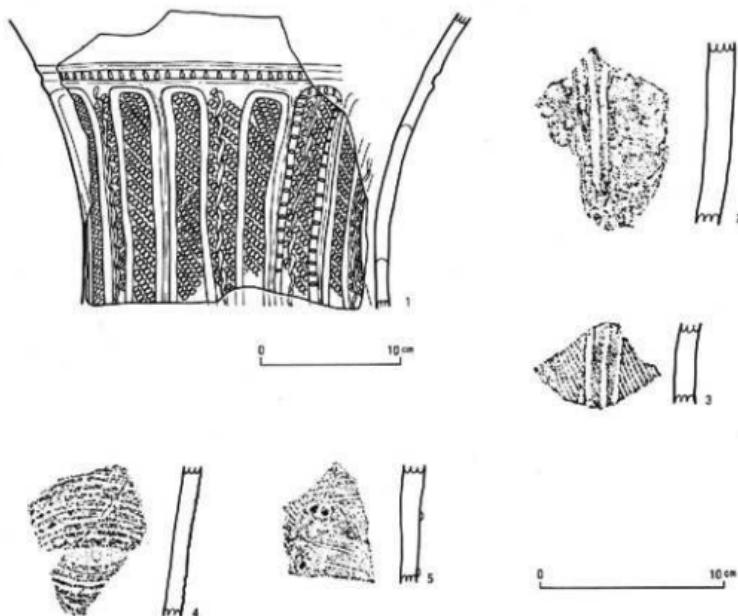
1. 住居址

1号住居址

遺構（第6図） 調査区の南部、B-9・10、C-9・10・11、D-9・10グリットに位置する。4.7×4.6mの規模で、隅丸方形を呈する。住居址の形状及び炉や柱穴の配置からみて、出入口は南西壁のほぼ中央部と推定され、主軸はN-31°-Eを示している。また、壁際には、周溝が一周している。尚、II層確認時において周溝が検出され住居址であることがわかったが



第6図 1号住居址実測図



第7図 1号住居址出土遺物実測図

開田工事の際に壁の立ち上がりはおろか、床面まで削り取られていた。

柱穴は、P1 ($44 \times 32 \times 42\text{cm}$)・P2 ($52 \times 48 \times 51\text{cm}$)・P3 ($80 \times 68 \times 58\text{cm}$)・P4 ($48 \times 46 \times 36\text{cm}$) の4穴であり、形状はほぼ円形を呈している。掘り込みは、床面に対して垂直に掘り込まれるのではなく、隅丸方形を呈する住居址の各コーナーにむかって斜めに掘り込まれている。また、奥壁際と周溝内には、主柱穴に対して支柱穴と思われるピットが、ほぼ等間隔に配置されている。

炉は、出入口に対してやや奥に位置し、長軸 130cm ・短軸 92cm で梢円形を呈している。また、炉の短軸方向と住居址の主軸がほぼ一致している。掘り込みは二段で摺鉢状になっており、検出面から 34cm の深さであった。覆土は、ローム粒子と炭化物を疎らに含む茶褐色土(1層)の単層であった。更にその上部からは、縦 78cm ・横 38cm ・厚さ 24cm を測る粘板岩の礫石が出土しており、炉を形成していた石材と思われる。二段構造となっている炉の奥壁の一段目にその石材の一部が残存し、接合状況を観察すると奥壁に組み込まれていたとの見方ができよう。そし

て内部には、倒れ込んだのではなく滑り込んだ状況を示していた。尚、内面には火焼状況を示す焼土の痕跡が認められた。

遺物（第7図） 出土遺物は、混入品を含めた土器（1～5）のみで、石器の検出にはいたらなかった。

1は、柱穴P2内部より出土している。大きくラッパ状に立ち上がる形状の胴部片で、沈線による逆「U」字文が縦位に施され、内部は結節縄文を充填する。2は、「ハ」の字状ないし矢羽状の沈線が施されるものと考えらるが、その施文もやや粗雑である。3は、地文に縄文を施し、縦走する沈線文の間は縄文が磨消されている。

これらの土器の特徴から縄文時代中期後葉も終末段階の様相を示していると考えられる。よって本住居址は、これを持って時期的位置づけをしたい。

尚、本住居址には、流れ込みと思われる縄文時代前期終末段階の土器片が認められた。4は、羽状条線文を地文とし、ボタン状の貼付けがなされたもので、諸磯C式土器の特徴を示す。5は、半截竹管状工具による向いあう半弧状に施文されるもので、諸磯C式土器から晴ヶ峰式・十三菩提式土器に比定されるものであろう。

2. 土 壤

1号土壤

遺構（第8図） D-2グリットに位置する。114×106cmの規模で円形プランを呈し、深さは20cmを測る。断面はレンズ状を呈する。また、中央部には2個の小穴を有する。覆土は2分層される。1層は暗茶褐色土で2層は明茶褐色土である。また、1、2層とも粘性・締りは強い。

尚、遺物の出土は認められなかった。

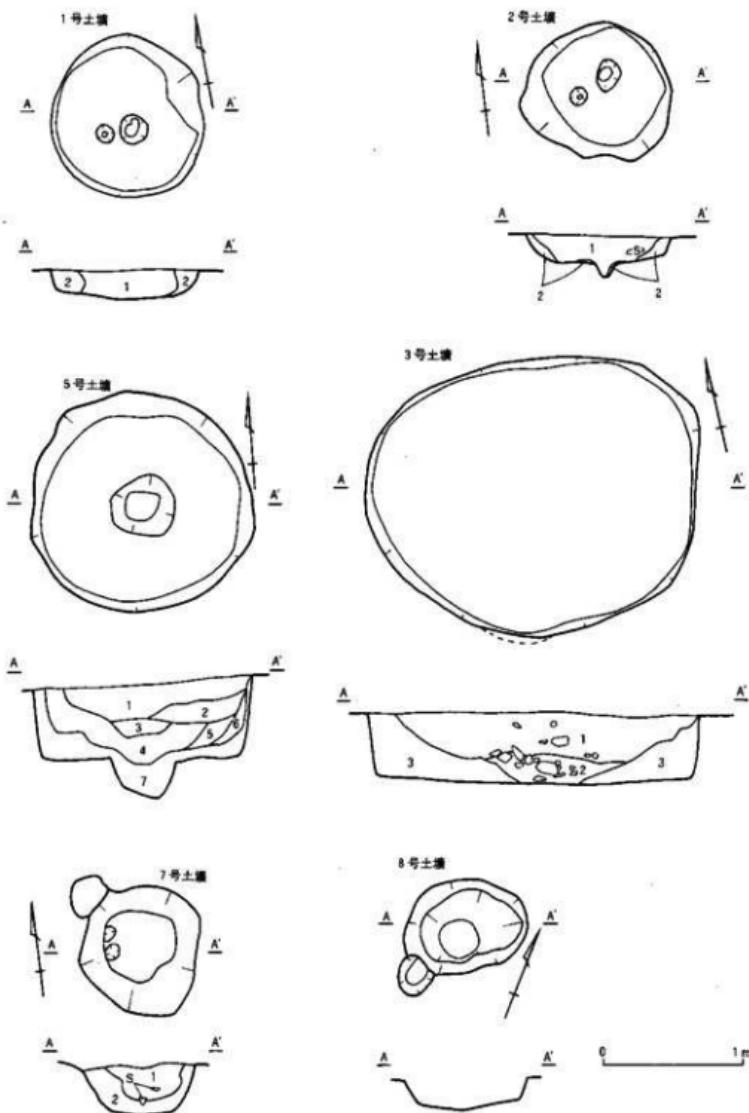
2号土壤

遺構（第8図） D-2グリットに位置する。110×100cmの規模で円形プランを呈する。深さは29cmを測り、断面はレンズ状を呈する。また、中央部には2個の小穴を有する。覆土は、2分層される。1層は暗茶褐色土で、2層は明茶褐色土である。そして1、2層とも、粘性・締りは強い。

遺物は、覆土中より縄文時代前期、晴ヶ峰・十三菩提式の特徴を示す土器片が出土している。

3号土壤

遺構（第8図） D-4グリットに位置する。244×200cmの規模で梢円形プランを呈する。深さは、50cmを測り、ほぼ直に掘り込まれ、底面は平である。よって断面は、長方形に近い台形である。覆土は、3分層され、典型的なレンズ状堆積を示していた。1層は、ローム粒子や炭化物を疎らに含む暗茶褐色土で、拳大の礫石も疎らに含まれていた。2層は、炭化物を疎らに含む黄褐色土で、拳大から人頭大よりやや小さな礫石を多く含んでいた。3層は、ローム粒



第8图 土壤实测图1

子を多く含む黄褐色土である。また、1～3層とも、粘性・締りは強かった。

遺物は、覆土中より、半截竹管状工具による向かい合う半弧状沈線文が施される（第11図1、以後11-1と省略する）、晴ヶ峰・十三菩提式の特徴を示すものや、同じく半截竹管状工具による沈線文構成を行う、中期初頭梨久保式の特徴を示す、いずれも土器片が出土している。

4号土壙

遺構（第9図） D-5・6グリットに位置する。290×210cmの規模で、精円形を呈している。深さは41cmを測る。ほぼ直に掘り込まれるもの、一部壁を抉り込むところもみられる。底面はほぼ平らであり、断面は長方形を呈している。覆土は、4分層され、レンズ状堆積を示していた。1層は、II層である黄色土（ローム）で、混入物は認められなかった。2層は、ローム粒子をまばらに含む明茶褐色土である。3層は、炭化物と拳大の礫石をまばらに含む暗茶褐色である。4層は、ローム粒子を多く含む明茶褐色土である。尚、粘性は2・3は強く、1・4はやや弱く、締りは全て感じられる。1層にみられる黄色土（ローム層）の堆積状況から考えて、人為的に埋められた可能性は強い。

遺物は、すべて覆土中より出土した土器片であり、縄文時代前期末のもの（11-2～4）と中期初頭のもの（11-5・6）が混在していた。2～4は、半截竹管状工具により縦位・横位・矢羽状に密に沈線を施すもので、諸磯C式の特徴を示している。5・6は、半截竹管状工具により、爪形文及び格子目上に沈線を施す梨久保式の特徴を示している。

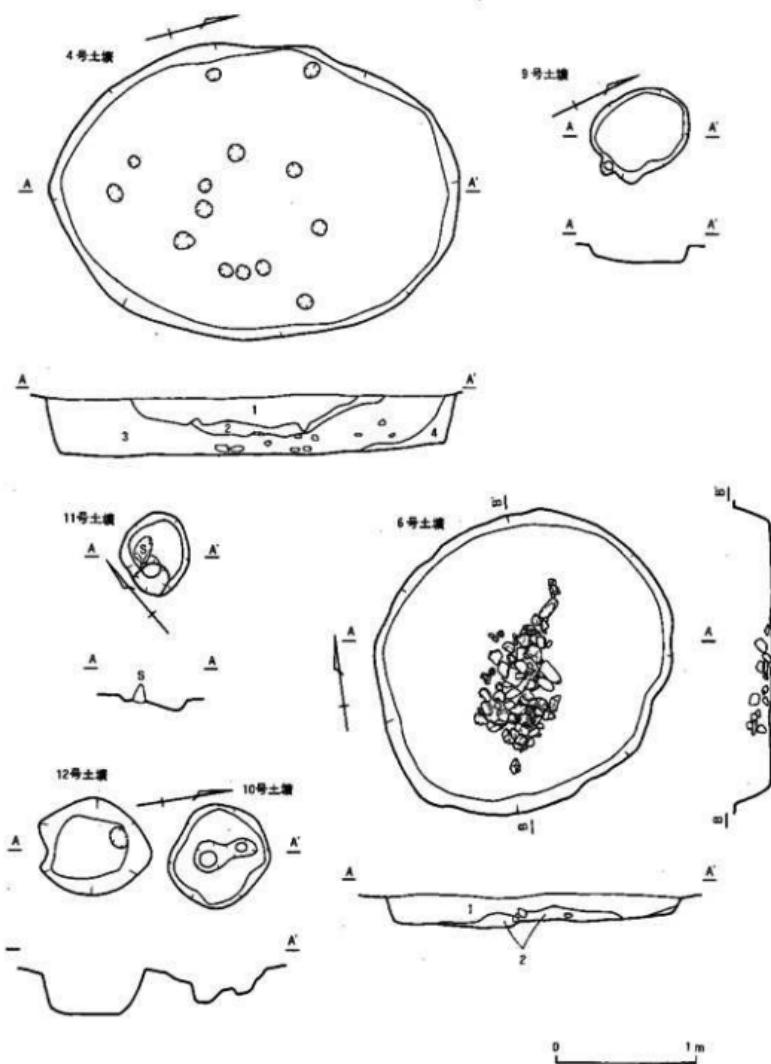
5号土壙

遺構（第8図） B-5グリットに位置する。160×154cmの規模で、円形プランを呈する。掘り込みはほぼ直で、深さは79cmを測り、断面は長方形を呈する。また、底面中央部に直径40cmで深さ30cmの小穴が認められ、内面は火燒状況を示していた。覆土は7分層され、レンズ状堆積が認められた。1層は、炭化物と多量の小礫・ローム粒子をまばらに含む黒褐色土で、粘性はややあり、締りは強い。2層は、ローム粒子を多く、炭化物をまばらに含む茶褐色土で、粘性はややあり、締りは強い。3層は、炭化物・ローム粒子をまばらに含む暗茶褐色土で、粘性は強く、締りはややある。4層は、ローム粒子を多く含むものの炭化物はごく少量である黄褐色で、粘性・締りは共にややある。5層は、ローム粒子をまばらに含む茶褐色土で粘性・締りはややある。6層はローム粒子を微かに含む黄褐色土で粘性は強く、締りはややある。7層は、ローム粒子と焼土を多く、炭化物をまばらに含む赤褐色土で、粘性は強く、締りはややある。

遺物は、縄文時代中期後葉土器片と凹石（11-12）が覆土中より出土している。12の凹石は、片面2ヶ所に凹痕が残るもので打・磨痕は認められない。石質は、花崗岩である。

6号土壙

遺構（第9図） C-6・7グリットに位置する。228×210cmの規模で、精円形プランを呈する。深さは20cmを測り、ほぼ直に掘り込まれ、底面も平で、断面は長方形を呈している。覆



第9回 土壤実測図2

土は、2分層された。1層は、ローム粒子をまばらに含む暗茶褐色土で、粘性・締りはややある。2層は、炭化物を多く含む黒褐色土で、粘性は強く締りはややある。また、2層中より砂岩・粘板岩・泥岩を中心とする拳大の大きさで50個余りの礫石が、集石状にまとまりをみせていた。礫石のほとんどは、火熱を受けて赤褐色を帯び、脆くなっていた。これらの状況から考えて、集石炉としての推測ができる。

遺物は、半截竹管状工具による集合沈線文土器（11-8）や羽状繩文が施されるもの（11-9）などの繩文時代前期末と、半截竹管状工具による沈線文で文様構成を行う中期初頭の特徴を示す土器片（11-7・10）が出土している。また、多くの炭化物に混じって炭化したくるみが1個出土している。

7号土壤

遺構（第8図） D-8グリットに位置する。直徑90cmを測る円形を呈する形状で、断面は半円形を呈し34cmの深さであった。覆土は、2分層される。1層は、炭化物と小礫をまばらに含む茶褐色土で、粘性・締りがともに強い。2層は、ローム粒子と炭化物をまばらに含む明茶褐色土で、粘性・締りがともにややある。

遺物の出土は、認められなかった。

8号土壤

遺構（第8図） C-8グリットに位置する。90×66cmの規模で、楕円形を呈する。深さは23cmを測り、断面は半円形を呈する。覆土は、暗茶褐色土の単層で、粘性・締りはややある。遺物の出土は認められなかった。

9号土壤

遺構（第9図） C-9グリットに位置する。78×64cmの規模で、楕円形を呈する。深さは13cmを測り、断面は半円形を呈する。覆土は、暗茶褐色土の単層で、粘性・締りはともにややある。

遺物の出土は認められなかった。

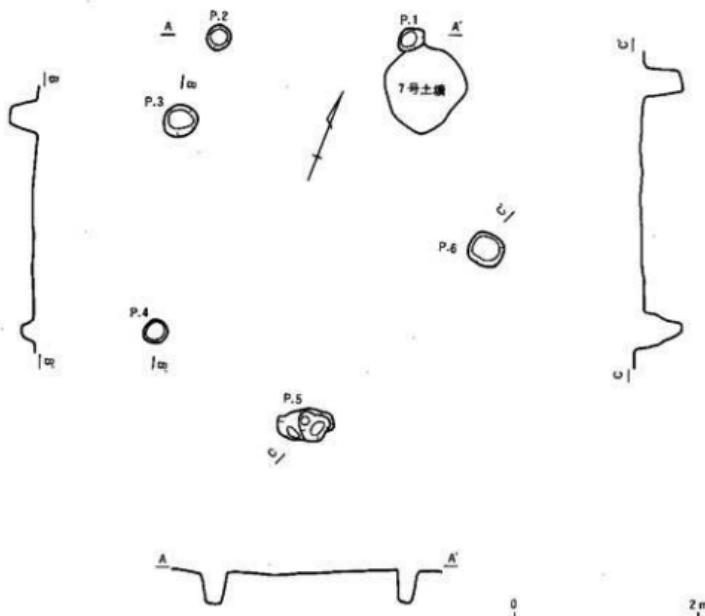
10号土壤

遺構（第9図） C-9グリットに位置する。70×64cmの規模で、円形を呈する。深さは25cmを測り、中央部に2個の小穴を有する。覆土は、暗茶褐色土の単層で、粘性・締りはともにややある。

遺物は、半截竹管状工具による沈線を施す繩文時代中期初頭の土器片が出土している。

11号土壤

遺構（第9図） C-9グリットに位置する。60×50cmの規模で、円形を呈する。深さは7cmで、底面に拳大よりやや大きな礫石があり、ピット状の小穴が認められる。覆土は、暗茶褐色土の単層で、粘性はややあるが、締りはあまりなかった。



第10図 ピット群実測図

遺物の出土はなかった。

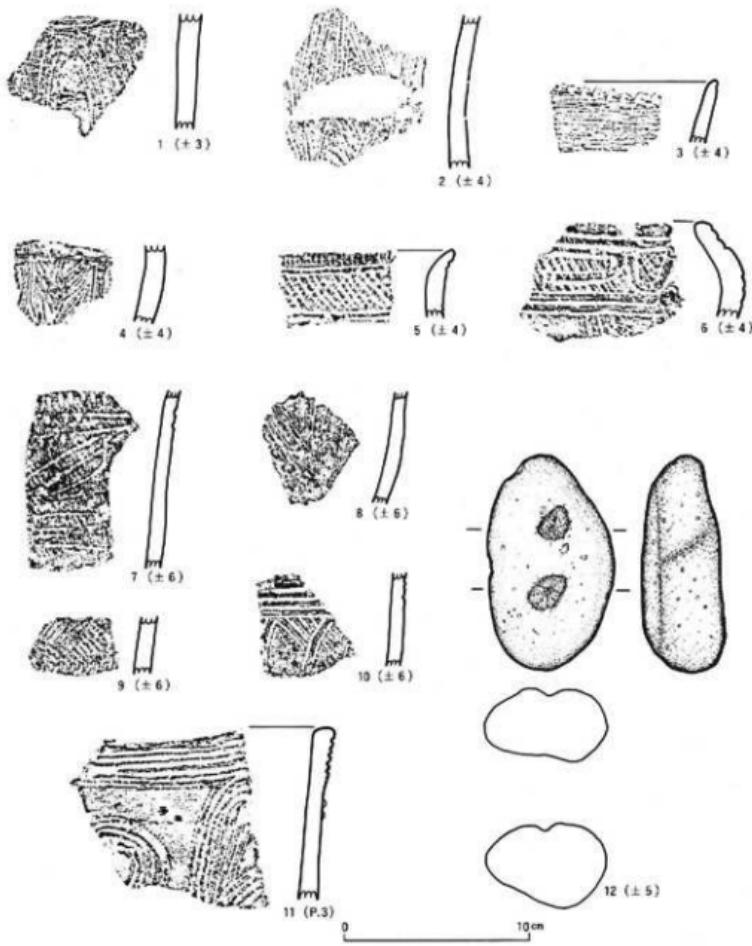
12号土壤

遺構（第9図） C-9グリットに位置する。84×70cmの規模で、梢円形を呈する。深さは38cmを測り、断面は台形を呈する。覆土は、暗茶褐色土の単層で、粘性・締りはともにややある。

遺物は、縄文時代中期後葉の土器片を出土している。

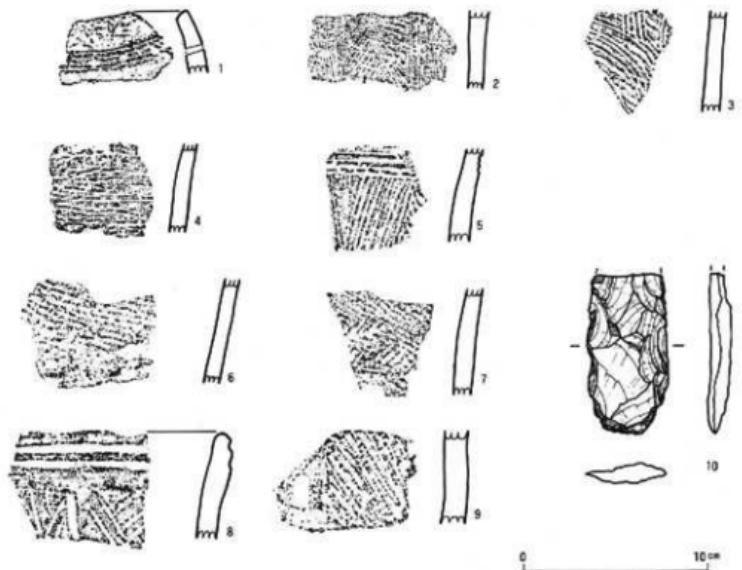
3. ピット群

遺構（第10図） C-8、D-7～9グリットに位置する。P1 (30×22×36cm)、P2 (28×26×25cm)、P3 (40×34×29cm)、P4 (30×24×14cm)、P5 (60×36×43cm)、P6 (40×40×41cm) の6穴が、ほぼ等間隔に一周した配置がみられる。火焼状況を示す炉のようなものはないため、上部を削り取られた住居址や、掘立建物址としては考えられない。



第11図 土壌・ピット群出土物実測図 [〔〕内は土壌及びピット番号を表す]

遺物は、縄文時代前期末の特徴を示す土器片が出土している。特にP3からは、ボタン状貼付文と半截竹管状工具による沈線文構成を行う波状口縁を呈する土器片(11-11)が出土している。



第12図 遺構外出土遺物実測図

4. 遺構外出土遺物

調査地内における、表面採集及び遺構の上面確認時に出土した、土器片と石器について遺構外出土遺物としてまとめた（第12図）。

1～7は、縄文時代前期末から縄文時代中期初頭の土器の特徴を示す一群である。1は、波状口縁を呈し、半截竹管状工具による沈線文と連続する穿孔文を施す。2は、半截竹管状工具による縦位・「ハ」の字状の沈線文を施す。3は、地文に縄文を施し、半円弧文に沈線文を重ねる。4は、半截竹管状工具による沈線文を横・縦位に充填する。5は、半截竹管状工具により、半円弧文状に沈線を施す。6は、斜状縄文と沈線文を施す。7は、羽状縄文を充填するものである。8・9は、縄文時代中期後葉末の特徴を示す。8は、縦位沈線文区画により逆「ハ」の字状に沈線を施すものである。9は、縦位隆線文区画の逆「ハ」の字状沈線文を施す。

10は、短冊形の打製石斧で中央より上部を欠損する。石質は、頁岩である。

第V章 まとめ

国道153号線・箕輪バイパス建設に伴う発掘調査は、今回の熊野上遺跡とその北側に位置する丸山遺跡の二遺跡をもってほぼ終了する。熊野上遺跡においては、西天竜用水路開設によって大正から昭和の初めにかけて大規模な構造改善が行われた結果、遺跡の破壊が余儀なくされてきた。特に、バイパスの路線がかかる今回の調査地は、地盤の切り盛りが激しい所で遺構の存在が危ぶまれていた。しかし調査の結果、上部の削平は著しかったものの、縄文時代の住居址と土壙群などの遺構が検出された。これは、当初の予想を考えれば、かなり大きな成果であったといえよう。よって本章では、前章で述べてきたそれらの内容について問題点を提起し、若干の考察を加えまとめとしたい。

検出した住居址1軒、土壙12基、ピット群1ヶ所の遺構は、出土遺物からみて縄文時代に属するといえよう。

住居址は、1軒のみの検出であったが、出土遺物から縄文時代中期後葉も終末段階のものとして位置づけることができた。特に住居址の形状・構造をみると、整った隅丸方形を呈しており、柱穴と炉の配置も規則性があり、周溝も巡らされる。また、柱穴の掘り込みを観察すると、住居址のコーナーに向かって斜めに掘り込まれており、周溝を中心にほぼ等間隔で支柱が配置されることなどから、建築学的な観点からしても良好な一資料といえよう。

次に、12基の土壙についてであるが、規模・形状によりいくつかに分けられるものの、内部遺構の諸特徴により、性格が異なるのではないかと考えられる。まず、1・2、7~12号土壙は、直径50~100cmの円形ないし梢円形の形状で、半円形に掘り込みがみられるものである。遺物も土器片がまばらに出土し、あまり大きな特徴はない。3・4号土壙は、長軸が2mを越える梢円形を呈するもので、ほぼ直に掘り込まれ底面は平である。むしろ土壙として捉えるよりも、縦穴状遺構として考えるべきか。覆土は、典型的とも言えるべきレンズ状堆積をしている。また、分層されたある特定の層中に礫石の混入が認められる。しかし特に注目すべき点は、4号土壙における1層の黄色土（ローム）の堆積状況である。自然堆積の観点から考えると矛盾を感じるものであり、人為的作用によるものとして捉えられよう。上部の削平を考慮すれば、ロームマウンドと呼ばれる一連の遺構の可能性もあることを指摘しておこう。5号土壙は、覆土中に赤土の混入が認められることと底面及び中央部の小穴内面に火焼状況を示す痕跡が認められたことなどから、使用目的は不明であるが、他とは別個できよう。最後に6号土壙についてであるが、火焼を受けた礫石が集石状にまとまりをみせている。単なる集石土壙としてではなく、集石炉として捉えた方が妥当ではなかろうか。丸山遺跡の調査（平成元年度）においても、6号土壙同様の特徴を示す集石が検出しているが、特に上部で集石が認められており、6号土

横のように底面に近いところでの集石とは少し特徴が異なっている。

ピット群は6穴より構成される一遺構として考えるのが妥当であるのか、それともまったく個々のピット状遺構として捉えるべきか、はっきりとつかめない。しかし、他の場所でのピット状遺構の検出がなくほぼ一箇所に集中している点を考慮すれば、その性格はつかめないものの、前者との見方ができよう。

最後に調査結果を総括すると、洞を隔てて北に位置する丸山遺跡と対比できよう。天竜川西岸の段丘突端部に位置し、気候及び地形的にはほぼ同じ条件の遺跡である。丸山遺跡の調査の結果、縄文時代中期の土壙群、中期中葉から後葉にかけて、奈良・平安時代の集落の存在がわかった。今回の熊野上遺跡の調査においては、縄文時代前期末から中期初頭の土壙群と中期後葉の住居址が検出できたが、平安時代の遺構・遺物の検出にはいたらなかった。調査結果のみで比較すると、集落構成の時期に差異が認められる。表採及び遺構外出土遺物をみても、熊野上遺跡では前期末の遺物が多出し、中期中葉及び中期後葉も唐草文形の土器群の存在がまったくみられなかった。両遺跡の全様を解明したわけではないが近接し同一条件下における遺跡としては、これらの調査結果において人間の定着と動きに必ずしも統一性と類似性は認められないとの結論が得られた。

末筆ではありますが、調査の進行に当たり深いご理解とご協力をいただきました沢区をはじめ県伊那建設事務所、そして直接調査に従事された団員の方々に厚くお礼申し上げます。

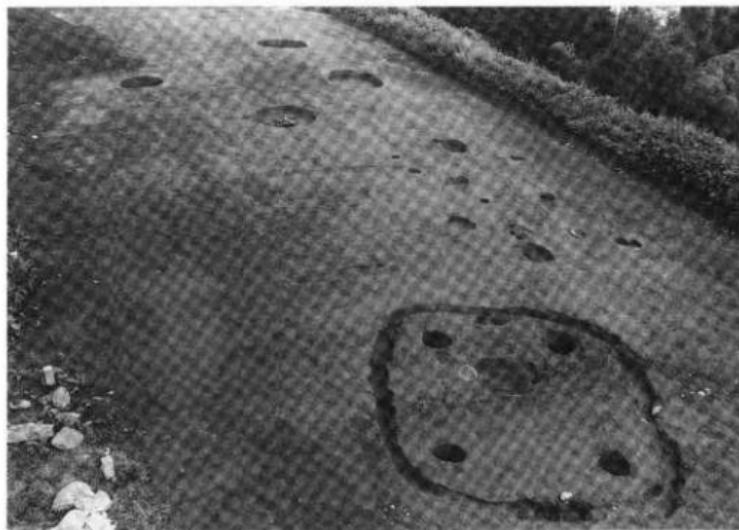
図 版



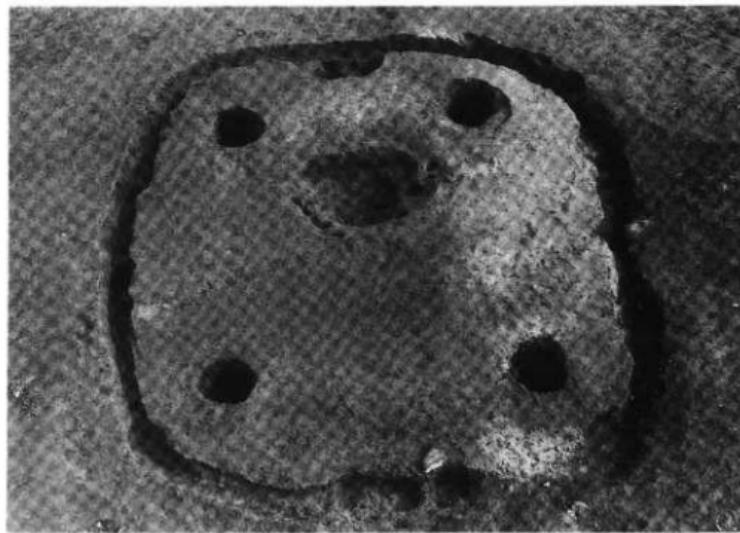
調査地遠景（東方より）



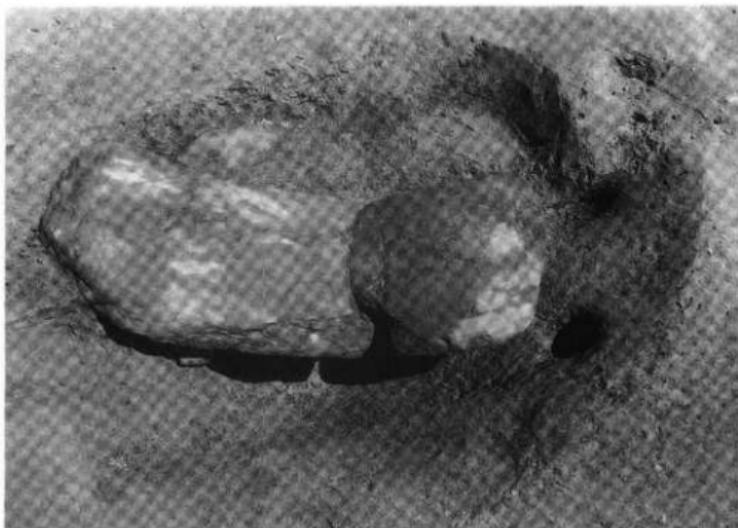
調査地近景（北東より）



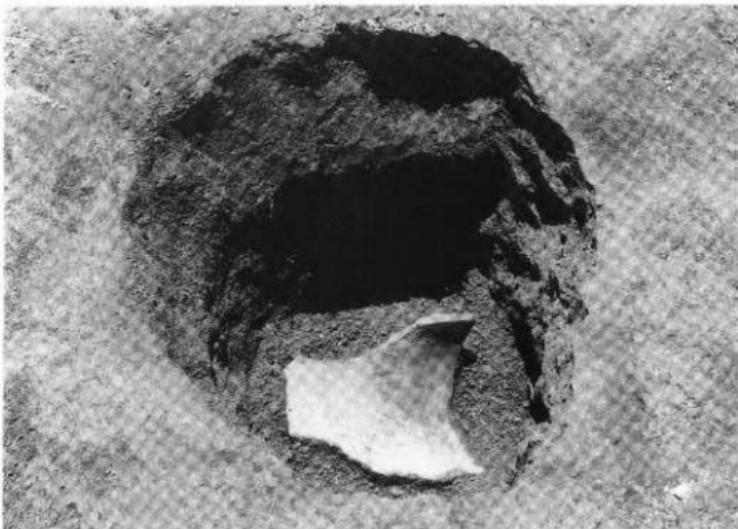
調査区全景（南西より）



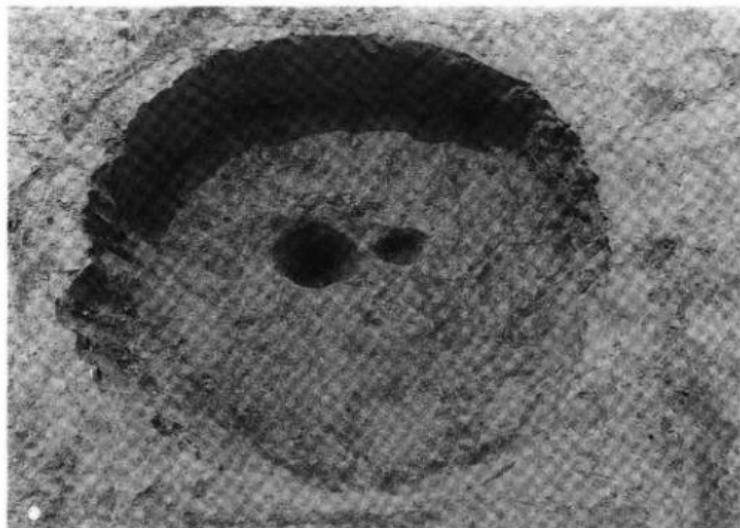
1号住居址



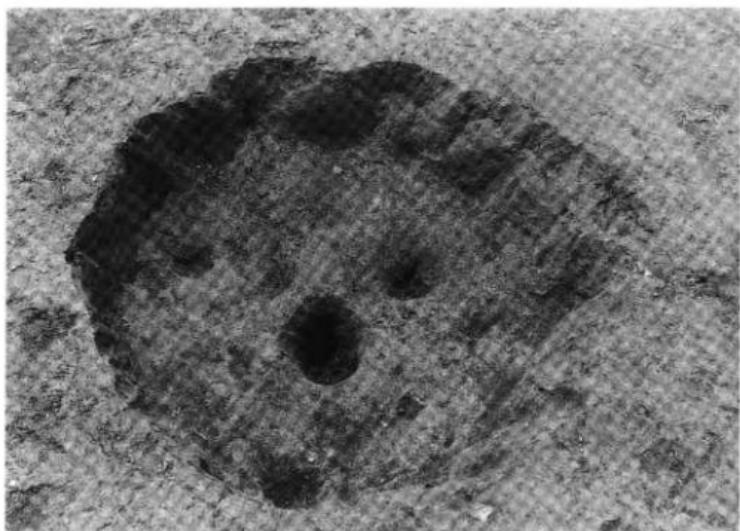
1号住居址炉



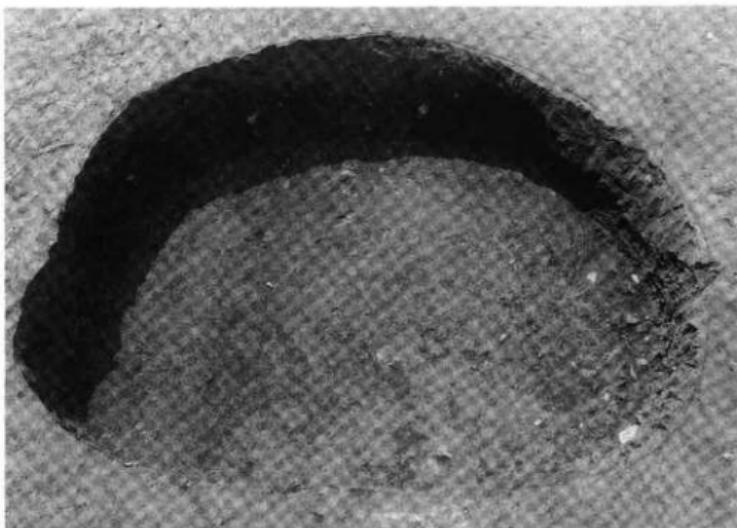
1号住居址柱穴内遺物出土状況



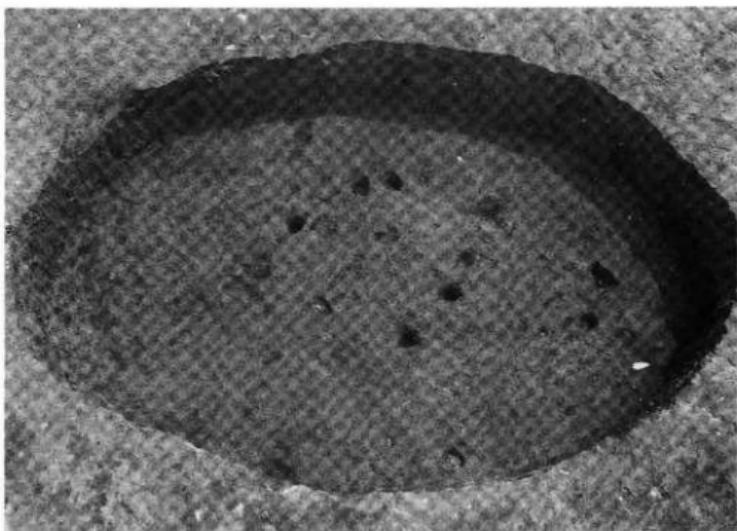
1号土壤



2号土壤

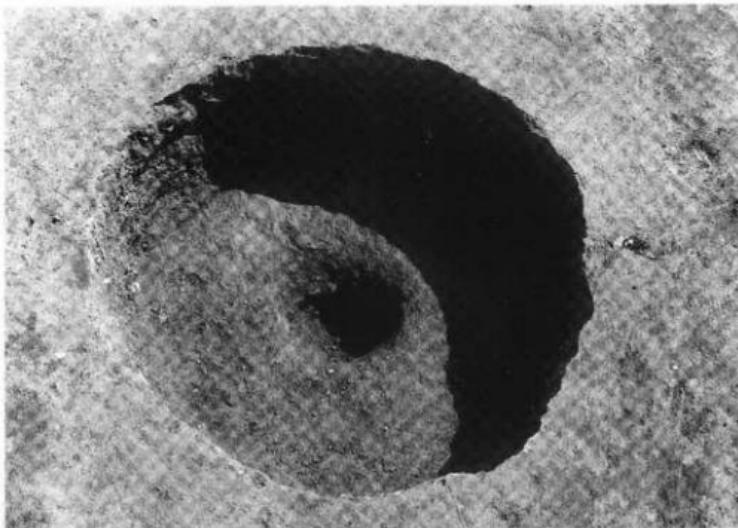


3号土壤



4号土壤

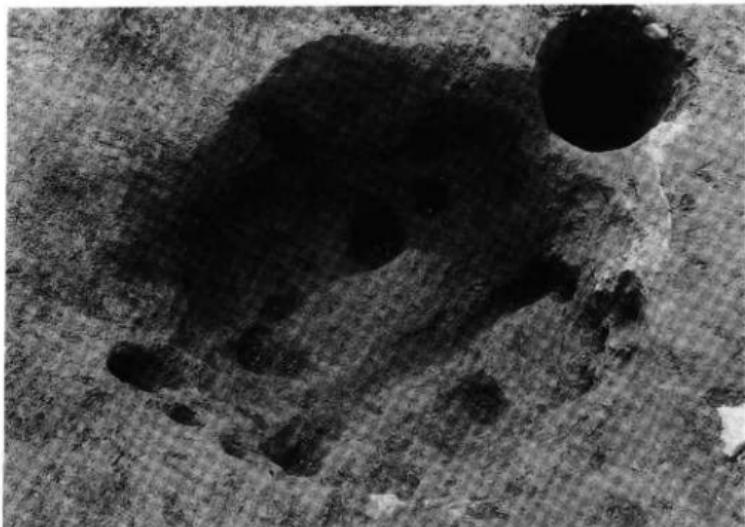
圖版
6



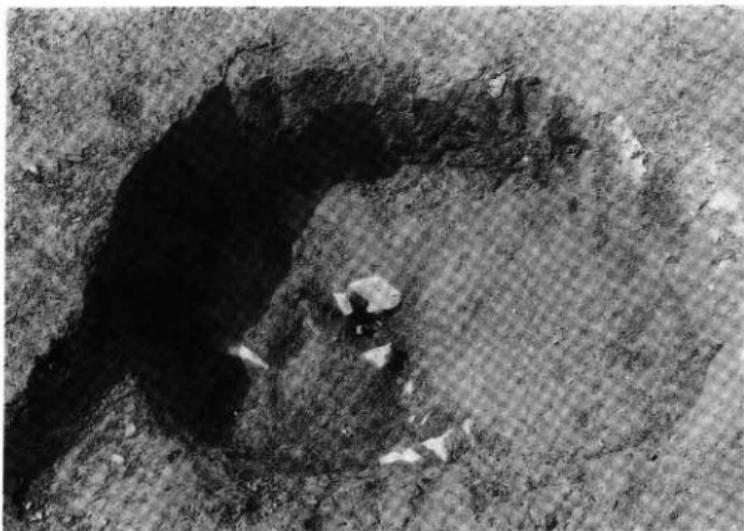
5号土壤



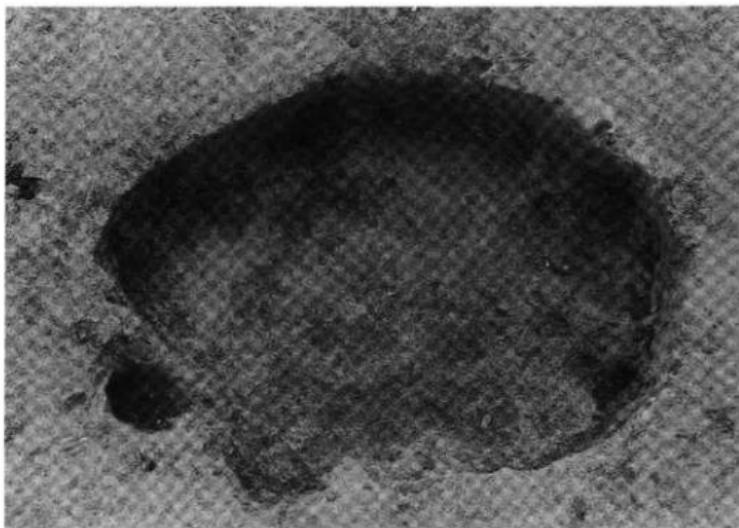
6号土壤



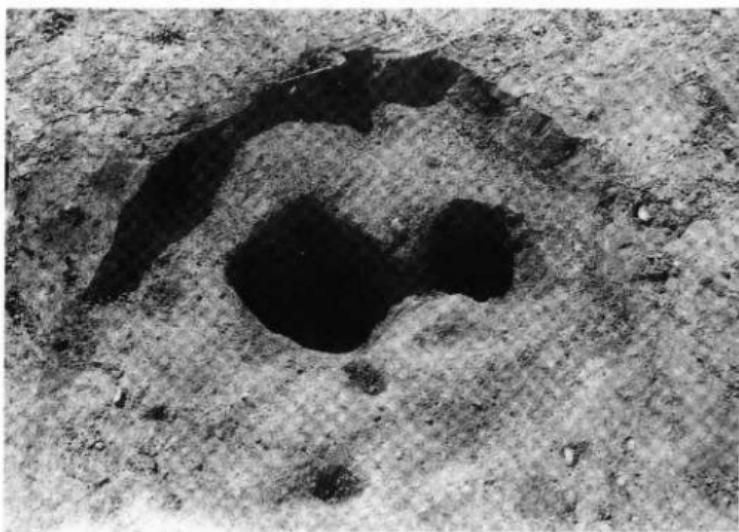
7号土壤



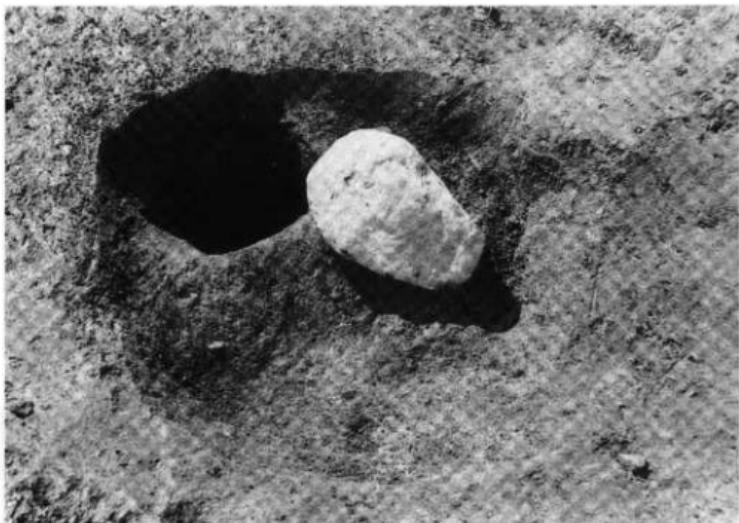
8号土壤



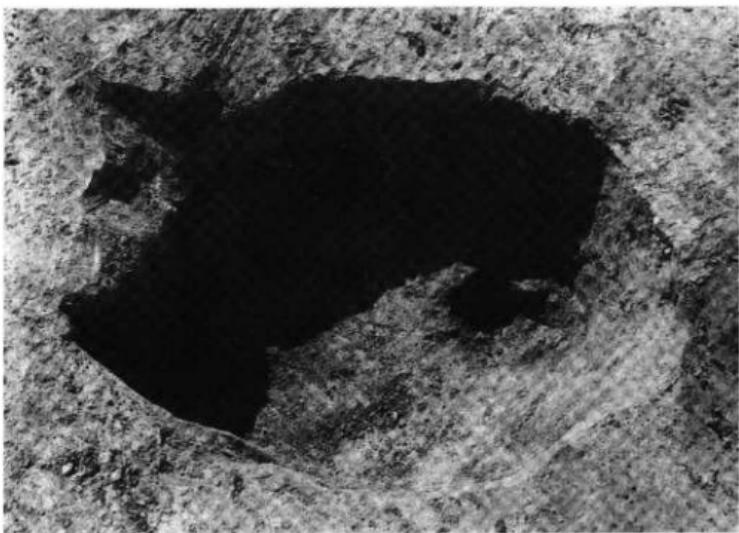
9号土壤



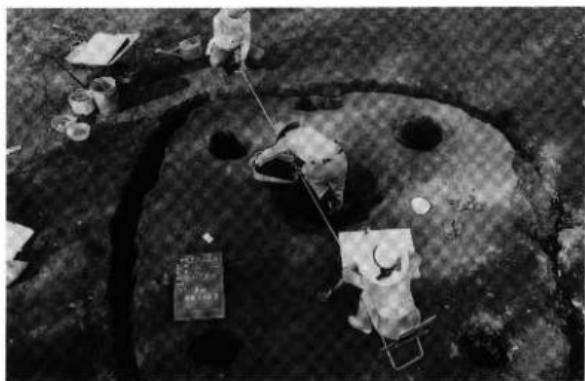
10号土壤



11号土壤



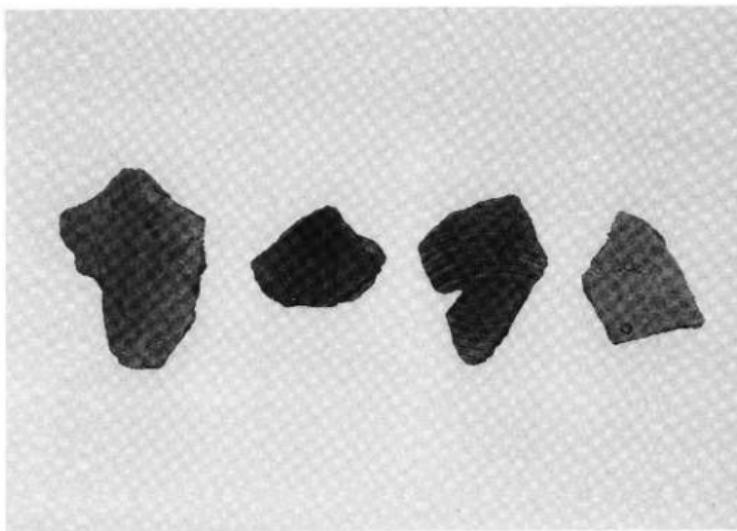
12号土壤



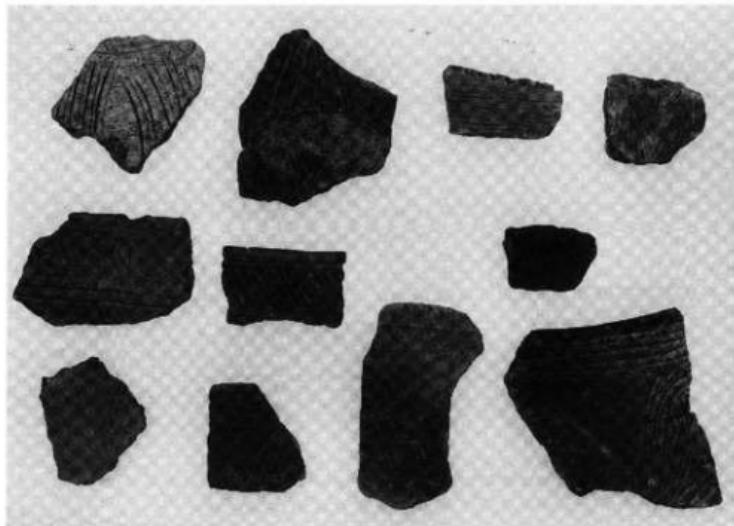
調查風景



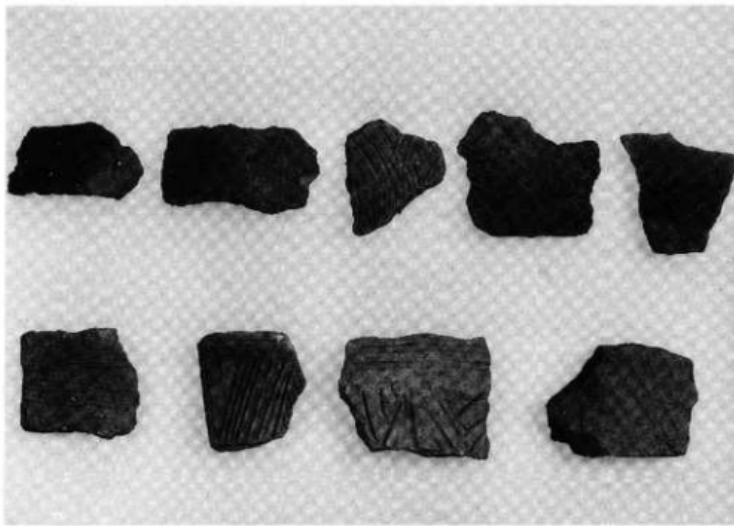
1号住居址出土遺物1



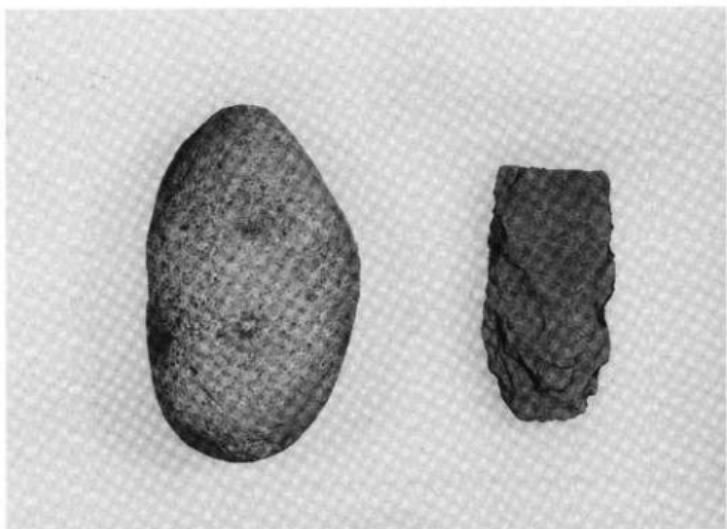
1号住居址出土遺物2



土壤出土遺物



遺構外出土遺物



土壤・遺構外出土遺物



調査団員

熊野上遺跡

**国道153号線箕輪バイパス建設に
伴う緊急発掘調査報告書**

平成2年3月20日 印刷

平成2年3月20日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会
長野県伊那建設事務所
印刷所 伊那市 梶小松総合印刷所